

2 奨進医会

— 『医談』から『刀圭新報』へ —

岡田 靖雄

精神科医療史研究会

日本医史学会の前身である奨進医会については、『日本医史学会総会百回記念誌』（二〇〇〇年）中の「日本医史学会の歩み」でかなりくわしくのべた。

私立奨進医会（途中から「私立」はとれる）は、一八九三年六月から機関誌『医談』を発行した。また一八九四年一二月から会長に田口和美をいただいで、その活動はかなり活発であった。一八九七年末には、特別会員（本会の賓客）三三名と会員二二二名とがいた。

田口会長が一九〇四年二月に死去したあと会長は不在で、一九〇九年一〇月になって片山國嘉が常務委員長につく。『医談』は月刊とされていたが、一九〇三年の発行は一一号、一九〇四年九号、一九〇五年一号、一

九〇六年一号、一九〇七年五号、一九〇八年一一号（ただし二号分合併号二回）となっている。このように機関誌発行が不規則なので、この時期の会の活動は充分にはかきのこされていない。一九〇八年一月発行の第一〇五号からは、会費納入お願いの緊急広告が毎号のつたが、同年一月発行の第一一四・一一五号で『医談』の発行は中止された。このまえ一九〇七年一月には奨進医会・若越医学会発起で杉田玄白先生贈位祝賀会がおこなわれ、また、これらの間にも三月四日恒例の医家先哲追薦会はおこなわれていた（ただし、一九〇六年は役員だけで）。

『医談』発行中止の翌年一九〇九年八月にはあたらしく機関誌『刀圭新報』が発刊され、会の活動は『医談』期の盛期よりも活発になった。一九一二年中頃の会員数は四三五名で、一五年前にくらべると倍増している（特別会員の制度はなくなっている）。

わたしは『自明治三十九年一月／総会費収納簿／奨進医会』を古書店で購入した。これは、ところどころ支出も記入して、一九〇五年一二月から一九一〇年七

月にいたっている。これによって、会務記載のとおしい期間、『医談』から『刀圭新報』にうつる空白期について奨進医学会の活動状況をさぐることをこころみた。

まず会員数（当然、会費を納入した会員の数）をみると、一九〇六年（年会費一円）六六名、一九〇七年（年会費二円、途中から七五銭に値下げされたか）八〇名、一九〇八年（年会費一円五〇銭）一三三名、一九〇九年（普通会员年一円五〇銭、正会員年二円）は普通会员二〇一名、正会員二〇名となっている。会費が機関紙代をふくむからには、発行不確実な期間に会員数が激減しているのは当然である。この会費納入会員名に、まえの特別会員の名は一人もみあたらない。特別会員には機関誌を贈呈していたのだろうが、これが当時もつづけられていたかどうかは不明である。特別会員中で一九一二年名簿にでてくるのは、石黒忠恵、片山國嘉、三宅秀だけである。

支出をみると、月一一円から三二円の支出があつて例会費とおもわれる。しかし、一九〇六年七月から一九〇七年二月はこの支出がない、活動停止期間か。

一九〇九年八月から一〇月にかけては「切手見本」として二一銭の収入が二二件ある。『刀圭新報』が発刊されて、拡張のための宣伝をさかんにしたのだろう。

一九〇九年二月の締めめに、残金三三円三九銭を某君（氏名よみきれず、会員ではなさそう）遺族へ従来慰労のためおくつた、とある。金額からみて、重要な会務をこなしてきた人なのだろう。会費収納簿の筆もここにかわる。機関誌の切り換えもこの人の死が関係しているか。また、同年一月から会費集めは集金人にゆだねられて、その手数料は五分となっていた。

なお、このあたりの経過においては、富士川游は会務を全面的にとりしきつてはいなかったようにおもえる。